

研究ノート

ものの見方・考え方を育てる「ものごと絵本」の指導

—幼児期から学童期への系統性をふまえて—

On the Instruction for Provoking Thoughts with “Picture Book of Things”

山中 吾郎

Goro YAMANAKA

Key words : 絵本指導, ものの見方・考え方, 幼稚園教育要領

1. はじめに

新しい「幼稚園教育要領」が2017年3月31日に公示された。現行教育要領との相違点は多々あるが、「総則」に「幼稚園教育において育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されたこともその一つである。

幼稚園における「活動全体によって育むもの」とされる「資質・能力」は以下の三つに整理されている。

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

これらは「小学校学習指導要領」(2017.3.31)に示された「資質・能力」の三つの柱、すなわち「(1)知識及び技能が習得されるようにすること。(2)思考力、判断力、表現力等を育成すること。(3)学びに向かう力、人間性等を涵養すること。」に対応している。

一方、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、「健康な心と体」「自立心」「協同性」などの10項目が挙げられており、それらは「保育所保育指針」(2008.3.28)

の「総則」に示された「保育の目標」の記述とほぼ重なっている¹⁾。これらのことは、教育要領の今次改訂が保・幼・小の系統性をかなり意識したものであることを意味している。

また、新しい教育要領の「総則」には、「指導計画の作成上の留意事項」の一つとして次のことが加えられた。

言語に関する能力の発達と思考力等の発達が関連していることを踏まえ、幼稚園生活全体を通して、幼児の発達を踏まえた言語環境を整え、言語活動の充実を図ること。

中央教育審議会の答申(2016.12.21)で言語能力の向上が「資質・能力」の育成のあり方に関わる課題であるとされたことを受けての追加であるが、小学校では現行の学習指導要領でも「言語活動の充実」が強調されている。つまり、ここにも幼・小の系統性重視の姿勢が表れていると言える。

ところが教育要領の「言葉」領域では、「言語に関する能力の発達」と「思考力等の発達」の関係についての具体的な記述は見当たらない。「総則」の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目の中に「思考力の芽生え」の項があるが、「物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりする」「自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりする」という子どもの姿が語られるだけで、どのような思考力を身につけること

でそれが可能になるかは書かれていない。

ある対象について考える（思考する）ためには、それに適した方法があるはずである。適切な考え方をを用いて思考を深めることは、思考力の重要な側面に違いない。ものごとの本質を認識するために「ものの見方・考え方」を身につけさせる重要性は、幼児期でも学童期でも変わらないはずである。

そこで本稿では、幼児期の子どもに、ことばで表現されたものを通じて、どのような「ものの見方・考え方」を育てるのか、絵本の指導を例に論じていくこととする。その際、小学校の国語科教育への発展も視野に入れて考察していきたい。

2. 絵本「どうやってねるのかな」で育てる「ものの見方・考え方」

(1) 「ものがたり絵本」と「ものごと絵本」

子どもたちは絵本が大好きである。保育現場では絵本の読み聞かせが日常的に行われている。「幼稚園教育要領」にも、「言葉」領域の「ねらい」の一つに「日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」とあり、子どもの言葉の発達や人間的な成長に果たす絵本の役割が重視されていることがわかる。

しかし教育要領では、「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」（「言葉」領域の「内容」）、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」（「言葉」領域の「内容の取扱い」）とあるように、絵本を「物語など」とともに、言語感覚を養い、想像力を豊かにするための教材としてとらえる傾向にある。絵本で思考力や「ものの見方・考え方」を育てるという観点は見受けられない。

西郷（1983）は絵本を「芸術的観点」と「教育的観点」から評価することを主張し、「わかりやすい、おもしろいものであって、しかも考えなければわからない、深い意味をもったもの」「考えることによって発見できる喜びがあるという点」に絵本の教育的役割を見いだしている。つまり、文芸体験をとおして子どもたちの想像力を豊かにすると同時に、「ものの見方・考え方」や思考力を育むことも絵本指導の「ねらい」となり得るということである。そもそも絵本には様々なジャンルがあり、

教育要領では「絵本や物語など」と表記されているが、すべての絵本が「物語」と同義というわけではない。たとえば中川ら（2011）の分類によれば、物語絵本や昔話絵本、名作絵本、創作絵本、伝記絵本など、物語を内容とした「物語系絵本」（本稿では「ものがたり絵本」と呼ぶ）以外に、科学絵本、認識絵本、動物絵本、自然絵本、数の絵本など、知識の伝達を内容とした「自然・社会科学系の絵本」（本稿では「ものごと絵本」と呼ぶ）などがある²⁾。

「ものがたり絵本」の主たる教育的価値が子どもたちを豊かなイメージの世界に誘い、想像力を育てることにあるとするならば、「ものごと絵本」のそれは、新たな認識に出会わせ、「ものの見方・考え方」や思考力を育むことにこそあると言えるだろう。

(2) 「比較」という「ものの見方・考え方」

図1の「どうやってねるのかな」（やぶうちまさゆき・1987年初版・福音館書店）は「ものごと絵本」に分類することができる



図1

表紙のコアラ以外に、シマリス、コウモリ、フラミンゴ、ラッコ、オオカミ、ヒョウ、ラクダ、キリンの8種類の動物が登場し、見開きページに「〇〇は どうやって ねるのかな」（〇〇には動物の名前が入る）とあり、次の見開きページには、その動物の眠り方がかかっている。問いと答えの対応がページをめくることで明らかになる構成は、子どもたちの興味を引くに十分である。また、コウモリが逆さにぶら下がってねることや、フラミンゴが一本足で立ってねること、オオカミもヒョウもラ

クダも腹ばいになってねることなど、子どもたちが初めて出会うであろう知識が、わかりやすくおもしろくかかれています。

では、この絵本でどのような「ものの見方・考え方」を育てることができるだろうか。

この絵本は「どうやってねるのかな」という一貫した問いに答える形式で眠り方が説明されているため、様々な動物がどのように眠っているかを容易に比較（対比）することができる。「比較」というのは、極めて基本的であると同時に重要な「ものの見方・考え方」である。Aという対象を認識するためには、Bと比較することによって、その特質を発見することができる。しかもこの絵本では、「眠り方」という比較する際の観点が明確に示されている。比較するためには観点が必要なのである。

「ものごと絵本」は「ものごとを教える絵本」ではなく、「ものごとの見方・考え方を育てる絵本」であると言ふべきであろう。「どうやってねるのかな」は、動物の眠り方に関する知識を与えるだけでなく、観点を決めて比較することで対象を深く認識する「ものの見方・考え方」を育てる教材となり得る。

(3)「理由」を問うことで思考力の基礎を培う

絵本「どうやってねるのかな」の裏表紙には、「2才～4才むき」と対象年齢が示されている。たしかに5歳児、6歳児にこの内容では、ややもの足りないかもしれない。「フラミンゴは どうやって ねるのかな」という問いに対する答えが「1ばんあしで たって ねます」となっているが、5・6歳児なら（3・4歳児であっても）、「なぜ1本足なの？」と理由を尋ねたくなるに違いない³⁾。この絵本では、眠り方の説明はしているが、その理由についてはまったく触れられていないのである。

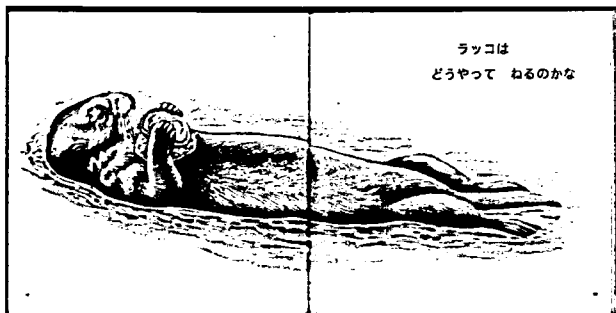


図2

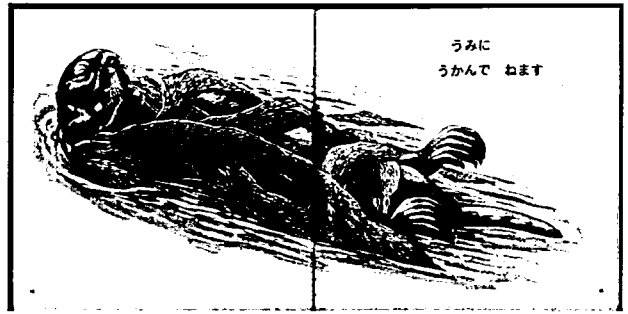


図3

ラッコについては図2、図3のようにかかっているのだが、「うみに うかんで ねます」というだけで、体に海藻を巻きつけていることは絵で示すのみである。ラッコは天敵の少ない海に浮かんで寝るが、寝ている間に流されてしまわないようにコンブやワカメを巻きつける。身を守るための工夫である。このことは理由を問わなければ見えてこない。

かつて教育出版の国語科教科書1年生上巻に、この絵本を部分的に抜粋したものが教材として掲載されていたことがある⁴⁾。その際、ラッコについて書かれた部分には「ながされないように、かいそうを からだに まきつけて ねます」という一文がつけ加えられた。小学校1年生にとって「なぜ、そのような眠り方をするのか」という理由を問うことは、必要な思考のプロセスだからであると思われる。ならば、幼児期の子どもたちに「読み聞かせ」をするときにも、保育者が「なぜだろうね」という問いかけを補うこと、あるいは子どもたちから「なぜ？」という問いを引き出す語りかけをすることも必要であろう。理由を問うことが思考力の基礎を培うことになるからである。

前項で観点を決めて比較する「ものの見方・考え方」について述べたが、それも理由を問うことと深く関連している。

比較には差異性に着目する「対比」以外にも、同一性に着目する「類比」がある。それぞれの動物によって眠り方は違うが（対比）、リスがまるくなって寝るのもラクダが腹ばいになって寝るのも、どちらも身を守るためである（類比）。オオカミやヒョウといった強い肉食獣でも、眠っているときは無防備である。よって、腹ばいになって眠ることで急所を守る。ヒョウはさらに樹上で眠ることで身を守っていることが絵で表現されている。動物の生態によって眠り方は異なるが、身を守るためという理由は共通している。そのような動物の本質も、「なぜ、そのような眠り方をするのか」と理由を問うことで認識できるのである。

3. 絵本「いぬがいっぱい」で育てる 「ものの見方・考え方」

(1) 二語文で表現された犬の様子「対比」

図4の「いぬがいっぱい」(グレース・スカールさく／やぶきみちこやく・1986年初版・福音館書店)には対象年齢などは明示されていないが、「福音館 あかちゃん絵本」というシリーズの中の1冊であることから、1・2歳児に読んであげてを想定して出版された絵本であることがわかる。見開きページに犬の様子が絵と文で表現されており、様々な犬が全部で8種類登場する。それらは「〇〇な いぬ」という文型により、主に二語文で簡潔に表現されている。



図4

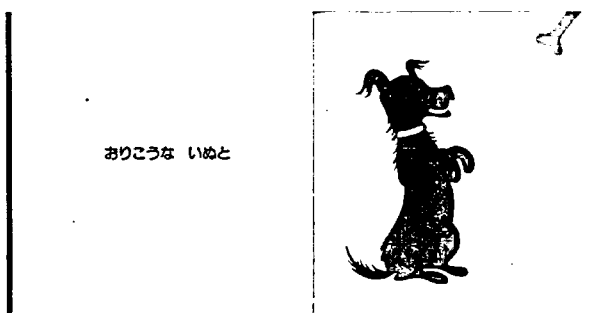


図5

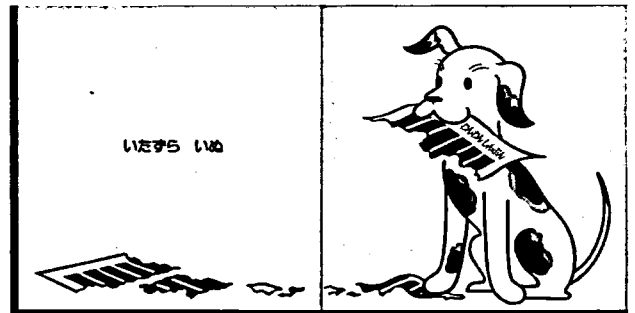


図6

1歳になる頃に一語文を話すようになった子どもは、2歳になる頃までに二語文を獲得していく。「保育所保育指針解説書」(2008)の「発達過程」の項に、この時期の子どもの言語習得について次のような記述がある⁵⁾。

子どもは、応答的な大人との関わりによって、自ら呼びかけたり、拒否を表す片言や一語文を言ったり、言葉で言い表せないことは、指さし、身振りなどで示し、親しい大人に自分の気持ちを伝えようとします。子どもの一語文や指さすものを言葉にして返していくなどの関わりにより、子どもは「マンマほしい」などの二語文を獲得していきます。

つまり、子どもの発する一語文に対して、言い直してあげたり、問いかけてあげたりする「応答的な対応」が、二語文の獲得に大きく影響するということである。「いぬがいっぱい」を読んであげるとは、子どもがすでに知っている「いぬ」という言葉に、「おりこうな」「げんきな」「はらぺこ」という様子を表現する言葉を加えることにより、言葉の世界を広げていくことにつながると言えよう。

「あかちゃん絵本」と銘打った絵本なので、二語文の獲得に資するというだけで十分な価値があるのだが、「どうやってねるのかな」とは違って、この絵本で新しい知識に出会えるというわけではない。精緻なタッチの絵で動物の特色を表現していた「どうやってねるのかな」に比べたら、「いぬがいっぱい」の絵はいかにも記号的である。

では、「いぬがいっぱい」は「どうやってねるのかな」に比べて「ものごと絵本」としての教材的価値が低いのかというと、そんなことはない。先に述べたように、「ものごと絵本」は「ものごとを教える絵本」ではなく、「ものごとの見方・考え方を育てる絵本」である。「いぬがいっぱい」は「比較」という「ものの見方・考え方」を育てるのに適した教材であると言える。

「いぬがいっぱい」には8種類の犬が登場するが、図5・6の「おりこうな いぬと」「いたずら いぬ」のように、奇数番目と偶数番目に登場する犬が対になって語られている。「どうやってねるのかな」は様々な動物の眠り方を羅列するような構成であったが、「いぬがいっぱい」は「しょんぼり いぬと」「げんきな いぬ」、「はらべこ いぬと」「おなかいっぱい いぬ」というように、対照的な犬の様子を1対1で比較しているの、対比がより際立つのである。

(2)個別・特殊のものを一般化・普遍化する

「いぬがいっぱい」の構成が「どうやってねるのかな」と異なるところがもう一つある。8種類4組の犬について語られた後、最後にすべての犬が再登場することである。図7・8に示したとおり、犬たちの絵に添えられた文は「いぬが いっぱい/みんな いっしょに」「わんわん」となる。

「いぬが いっぱい」は様々な様子の違う個別の犬のこと、すなわち犬の差異性を表現しており、「みんな いっしょに」は個別の犬を一般化して「いぬ」という種として見ること、すなわち犬の同一性を表現している。外見も性格も、していることも「違う」犬たちではあるが、それらは同時に「いぬ」という「同じ」カテゴリーに分類される。どちらか一方ではなく、「違うけど同じ」。この素朴だが本質的な認識が見開きページに表現されているのである。

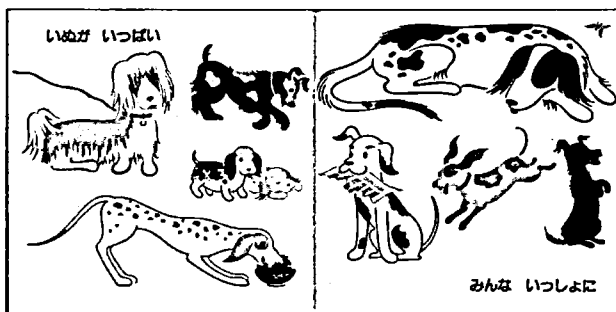


図7

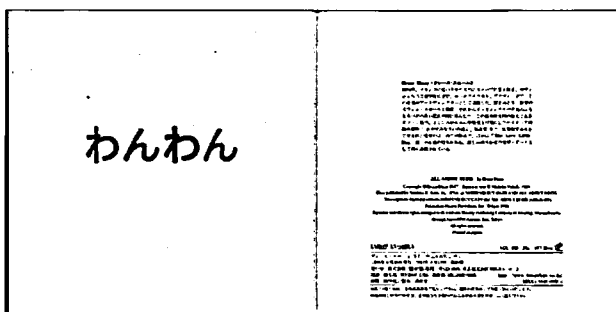


図8

また、最終ページの「わんわん」は、鳴き声という代表的な属性で「いぬ」というカテゴリー全体を表現したものとと言える。

今井(2013)は、2歳児を対象とした実験⁶⁾の結果、まったく知らない言葉を知らないモノといっしょに見せられると、子どもは色や大きさ、模様などではなく形に注目して、形が似ているモノにその言葉を使えると思っていることを明らかにした。子どもにとって言葉を一般化する時の拠り所となる類似性(「似ている」こと)とは、そのモノのもつ属性のうち、色や大きさや模様ではなく、形という属性にあることがわかった。

一方「いぬがいっぱい」では、目に見える形という属性ではなく、「わんわん」という鳴き声に着目して様々な犬がすべて「いぬ」としてカテゴライズされるものとしている。四本足である、しっぽがある、全身に毛が生えているなど、犬のもつ属性は数々あるが、「わんわん」と吠えることが最も犬らしい属性だからであろう。「しょんぼり いぬ」であろうと「げんきな いぬ」であろうと、「わんわん」と吠えるのが「いぬ」なのである。

形であれ、鳴き声であれ、ある一つの属性でカテゴリー全体を認識・表現することは、個別・特殊の対象を一般化・普遍化するために必要な思考力の基礎となる。そのような「ものの見方・考え方」は、小学校1年生の国語科で学ぶ、言葉の上位概念・下位概念の学習へと発展する。

東京書籍の国語教科書(2015年度版)1年生下巻に「まとめて よぶ ことば」という単元がある。

「バス」「トラック」「きゅうきゅう車」は、どれも「じどう車」です。

「きゃくせん」「ヨット」「ボート」は、どれも「ふね」です。

【中略】

「じどう車」や「ふね」を、まとめて よぶ ことばは なんでしょう。

それは、「のりもの」です。「ひこうき」や「でん車」も、「のりもの」です。

バスとトラックと救急車は、それぞれ形も大きさも使用目的も違うが、エンジンの働きでタイヤを回転させて移動するという仕組みは同じである。だから「じどう車」は、バス、トラック、救急車を「まとめて よぶ」言葉であり、より上位の概念ということになる。さらに

「じどう車」は「ふね」「ひこうき」「でん車」といった言葉とともに「まとめる」ことで、「のりもの」という上位概念でとらえ直すこと、すなわち一般化・普遍化することができる。

【いぬがいっぱい】で様々な犬を「みんな いっしょに／わんわん」と表現したように、個別・特殊の対象に共通する属性に着目して「まとめる」ことで、より一般化された言葉で上位の概念を認識・表現することができるのである。

4. まとめ

2冊の「ものごと絵本」の指導を例に、幼児期に育てたい「ものの見方・考え方」について考察してきた。

【どうやってねるのかな】でも【いぬがいっぱい】でも、指導の中心となるのは「比較」(対比・類比)するという「ものの見方・考え方」であった。対比して差異性を発見することにより、「なぜ、ちがうのか」と「理由」を問う思考が生まれる。また、類比して同一性を発見することにより、ものごとの本質が浮かびあがる。幼児期の子どもたちが好む「ものがたり絵本」にはくり返しの表現が多用されるが、くり返しは類比(反復)であり、類比(反復)は本質を強調する。

さらに、比較することで対象を類別することができ、類別するということは個別・特殊のものを一般化・普遍化して認識・表現することにつながる。

そして、これらの「ものの見方・考え方」は、小学校で身につけさせたい思考力の基礎となっているのである。

「ものごと絵本」のことを「知識絵本」と呼ぶこともあるが、何度も述べてきたように、子どもたちに新しい知識を与えることだけが絵本指導の目的ではない。ものごとの見方・考え方を育て、思考力の基礎を培うことこそが、「ものごと絵本」がもつ大切な教育的価値なのである。

注

- 1) 10項目のうち「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」を除く9項目が、多少の表現の異同はあるものの、「保育の目標」に含まれている。
- 2) 他にも「宗教系の絵本」「ことばの絵本」「キャラクターの絵本」「しかけのある絵本」などを挙げている。
- 3) フラミンゴが1本足で眠るのは、水辺で眠っているため体温を奪われにくくするため。
- 4) 1992年版、1996年版、2000年版に掲載。題名は「どのようにして ねるのかな」に改変されていた。

- 5) 「第2章 子どもの発達」の「2. 発達過程」の「おむね1歳3か月から2歳未満」の項による。
- 6) 今井の行った実験は以下のようなもの。まず、日常では見かけない、名前も知らないであろう動物のぬいぐるみを2歳児に見せ、その名前を「これはネケよ」と教える。次に、「ネケ」と名づけたモノとは別の四つのモノと一っしょに子どもに見せ、「ネケをちょうだい」と言う。すると子どもは「ネケ」と名づけたモノ以外に、形がよく似たぬいぐるみを選んだ。同じぬいぐるみでも、形が似ていないモノは選ばなかった。「ネケ」と「ネケでない」モノの判断は、形という属性に着目して行われているということ。

参考・引用文献

- ・今井むつみ(2013)『ことばの発達の謎を解く』ちくまプリマー新書
- ・グレース・スカール(1986)やぶきみちこ(訳)『いぬがいっぱい』福音館書店
- ・厚生労働省(2008)『保育所保育指針解説書』フレーベル館
- ・西郷竹彦(編著)(1983)『読んであげたい絵本』(全2巻)明治図書
- ・中央教育審議会(2016.12.21)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」
- ・中川素子・吉田新一・石井光恵・佐藤博一(編)(2011)『絵本の事典』朝倉書店
- ・文部科学省(2017.3.31)「幼稚園教育要領」
- ・文部科学省(2017.3.31)「小学校学習指導要領」
- ・藪内正幸(1987)『どうやってねるのかな』福音館書店